

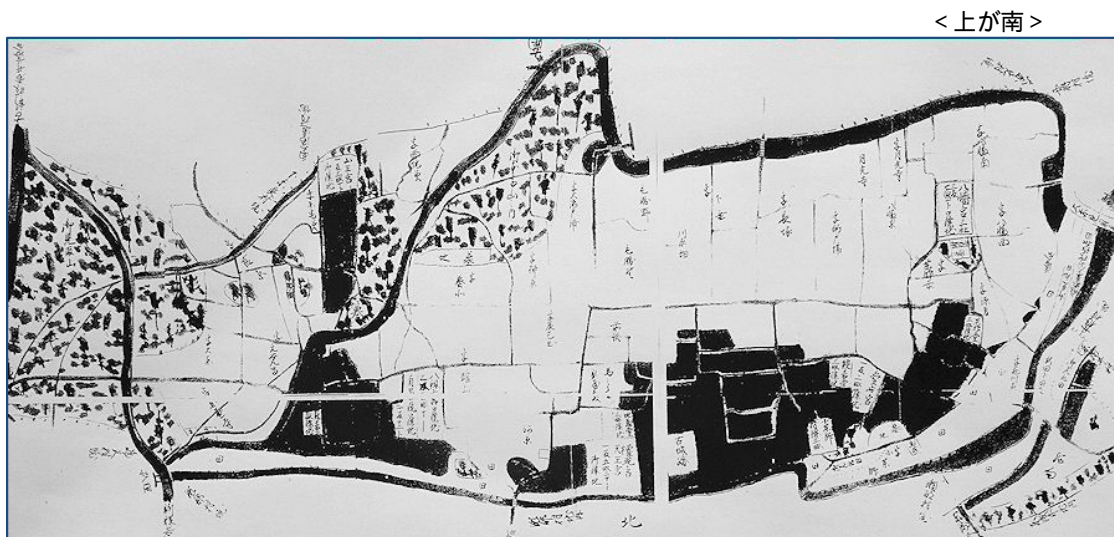
## 時之島の帯田川とは

熊澤 良嗣 調

下の図は天保<sup>てんぽう</sup>12年の『時之嶋村絵図』である。左下から南東へと斜めに伸びているのが新般若用水、左端の太い南北線が草井方面から伸びてきた般若川で、両岸の森林地帯は現在の春明・地域文化広場に相当する。

森の中から南西に出ているのが千間堀川、左下から南西に太く伸びているのが帯田川<sup>おびた</sup>、その直下の埋杵から真横に伸びているのが今でいう時之島排水路である。時之島排水路の最後は丹羽地内に入っており、大赤見用水と埋杵で交差しているのが見える。

絵図真ん中の縦の白線は、時之島村の東半分と西半分の2枚の絵図を貼り合わせたためにできたものである。

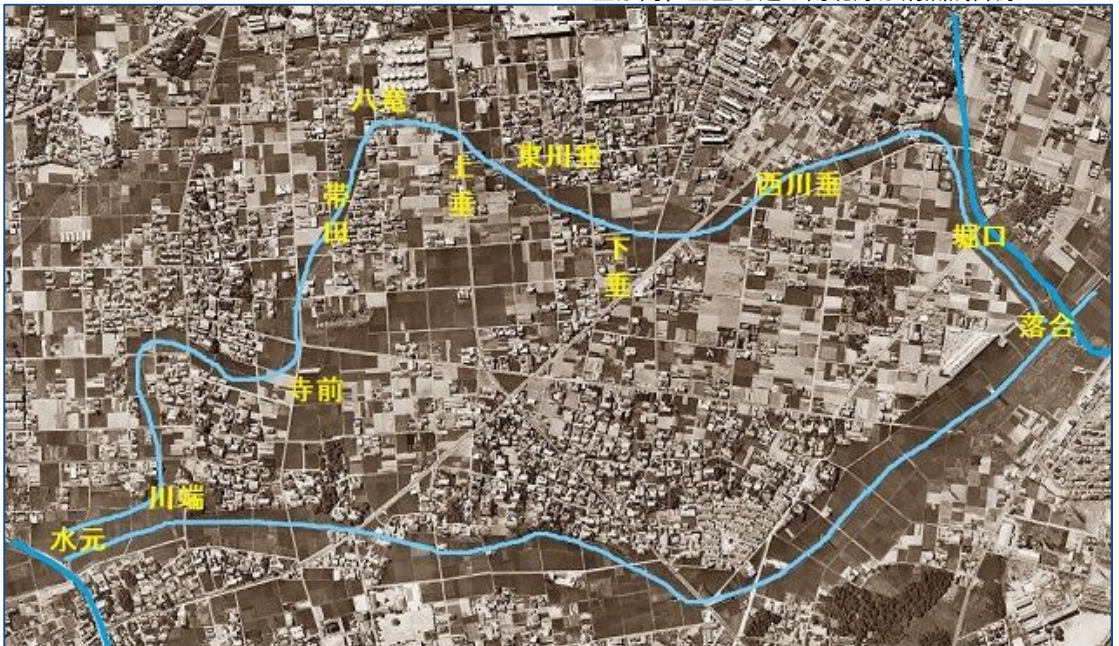


今回取り上げる「帯田川」の名前はほとんど知られていないが、原誠完氏の『時之島小字地名探當証』の「下途<sup>おりと</sup>」(下り戸)の項に出ている。お許しをいただき、『探當証』に出ている字名と、『土地宝典』(明治から戦後にかけて作られた地図帳)などに準拠して作成された字名図を参照しながら、帯田川の川筋をたどってみる。

(字名図には今は存在しない字名がある。また、字の区切りが現在とは異なっている箇所がある。しかし、地図上の字の位置はほとんど変わっていない。)

帯田川は時之島の東北端の土地「水元」<sup>みずもと</sup> 海拔 13m、現在「時之島第一分水口」があるから始まり、「川端」・「中新田」を通過し、<sup>じしやういん</sup>自昌院前の地を意味する「寺前」へと進む。寺前から「八竜」<sup>はちりゅう</sup>(同 12m)までは帯のように細長い「帯田」の中を進む。

<上が南、上垂を通る南北線が清洲浅井線>



八竜は「桃花亭」がある所で、西大海道との境界にあたる千間堀川がすぐ南を流れている。昔は小山があって周りは田畑ばかりだったから、遠くからもよく見えたものである。

(『愛知縣西成村全図』には三角点の記号と海拔 18.4m の表示が見られる。)

帯田川は八竜で折れて北向きになり、「<sup>かみだれ</sup>上垂」(同 12m)へと降下する。字名図には八竜の北に「北八龍」や上述の「<sup>おりど</sup>下り戸」(下途)などの名が見られる。

上垂から水流は西に向かい、「東川垂」・「中垂」・「下垂」・「西川垂」——東川垂と西川垂

は西成側で用いる字名 と西に進んで、「落合」で時之島排水路に落ちる。落合は海拔10m で県立一宮東養護学校の東にあり、時之島南西端の土地である。

落合では「大赤見用水」が帯田川の南を並走しているが、流れの方向は逆で、若年の裁松寺方面へ流れている。1748年から大赤見用水は「井端」(丹羽団地)の北で大江川の水を取り、「落合」・「堀口」・「裁松寺腰」を通過し、柚木嵐から馬見塚へと流れている。

以上帯田川を概観したが、四季を通して帯田川に水があったわけではないと原誠完氏は述べている。木曾川が洪水を起こせば一面冠水した帯田川の一帯であるが、平年は稲作期になると新般若用水から水を引いて米をつくり、稲作が終われば水を止めて畑に転換し、他の作物をつくったのだらうという。

最後に、原氏の著書から一部引用させていただく。

### 帯田（おびた）

時之島の中央を水元から八竜に、タスキがけに流れていた自然の流れを活用し、細長く帯状に田が存在したところ。稲作の時期には水を引き水田とし、収穫の後は畑として麦や蔬菜類をつくる2毛作地帯（畑田と言っていた）であった。

### 下途（おりと）

帯田川の水が八竜へと流れ落ちる途中になるところで、ここからは上垂から下垂に水流は続き、落合へとそそぐ。明治初年の小字境図では、下り戸と表記されており、下り門と記された事もあるようだ。水の流れを指しており、水の重要さが偲ばれる。